

バングラデシュからの手紙 2002年5月

ブラザー・フランクからのメッセージ

友人のみなさんへ

ブラザー・フランクより

マイメンシン(バングラデシュ)にて

2002年5月19日聖霊降臨(ペンテコステ)の日に

去年のクリスマスに、イスラム教徒の隣人たちに関するお話をみなさんにお伝えしました。今日は、バングラデシュの障害者について、また彼らとわたしたちの関わりについてお伝えしたいと思います。

もう長い間にわたって、わたしたちはこの地域に暮らす多くの障害者の近くに寄り添ってきました。とくにCCH(障害者コミュニティセンター)が始まってからは、この働きを通して彼らの近くにとどまってきました。

去年からは、さらに新しい取り組みが始まりました。去年、バングラデシュの司教団の要請によって、わたしたちはバングラデシュ北部の四つの教区に広がる何百もの村々のキリスト教徒に呼びかけ、「障害者との信頼の巡礼」を企画したのです。これにより、キリスト教徒の障害者との交わりも深まることになりました。この「障害者との信頼の巡礼」の後、さらにたくさんの方々が準備に関わり、今年は新たに二つの「障害者との信頼の巡礼」が、復活祭後の季節に開かれました。「信頼の巡礼」、それはこの難しい時代に前に進むことを助けてくれる祈りの祝祭、交わりの祝祭です。

バングラデシュや世界各地で暴力が増え続けています。競争が助長されています。それは、他者よりもっと強い者になろう、他者よりもっと装備して影響力を持つ者になろうという競争です。しかし、このような世界の中であって、実は、弱い人々や壊れやすい人々が、より強い力を獲得しようとするわたしたちの病を癒し、平和への道を整えてくれるのです。彼らは力を求めません。しかし理解されることと友情を求めて声を上げるのです。

友情と交わりを求める彼らの叫びが、人々を結びつけてゆきます。これは支配力を求めるのとは全く逆の動きです。

今日わたしたちに必要なのは信頼です。それは神への信頼です。そして、弱い人々の中にある静かで、穏やかな力への信頼です。連帯と心からの深い理解や交わりの満ちた社会を模索するときに、このような無力で傷つきやすい人々が、わたしたちの内側にあるもっ

とも美しく光に満ちたものを勇気づけてくれるのです。

このような理解が、今年新たな「障害者との信頼の巡礼」を準備するときの土台となりました。去年の「巡礼」の体験は多くの人々の心と目を開き、それは奇跡の日々としてまだ記憶に残っていました。車椅子に乗った身体麻痺の人々が高い丘々の頂きに立ち、全盲の人々がバングラデシュ北部の美しい景色を眺め、知的障害の青年たちが、ふだんはほとんど歩くことのできない人々と踊りました。そして彼らは一緒に祈りました。神の内に存在の深い意味を感じさせたこの祈りの体験は、巡礼の後も、多くの人々をその深い痛みと闇の日々に支えたのでした。

このような巡礼に、より遠くの村々の人々も参加できるようにと、今年は二カ所での巡礼を開くことになりました。マイメンシン近くのバロマリとバングラデシュ北西の隅にあるディナシプルという所です。再び、青年たちが何百もの村々を準備のために訪れました。すでに会ったことのある障害者を訪ね、さらに出会っていない障害者を探し出してゆきました。青年たちは障害者の物語に耳を傾け、それぞれの地域で、障害者と近隣の人々の出会いと分かち合いを築くために小さな集いをいくつも開いたのです。どの村でも、この巡礼に介助者として協力してくれる青年たちを探し、この企画に招き込みました。そして介助を必要とする障害者たちは、この青年たちの心に信頼を置いたのです。

この二つの巡礼は忘れがたい出来事となりました。バロマリの巡礼には約300人が、ディナシプルの巡礼には約500人が集まり、それは、祈りと友情と信頼の祝祭、すなわち希望の祝祭となったのです。

3日間にわたって開かれたこの巡礼で、祈りのとき——朝と夕の祈り、ロザリオ、十字架の道行き、洗足式、そしてユーカリスト(ミサ・聖餐式)——が、すべての中心でした。ダッカの司教、テオトニコス司教は、洗足式で12人の障害をもった少年少女たちの足を洗いました。知的障害の青年と全盲の少女が祭壇にパンとブドウ酒を捧げました。わたしたちを養うパンとブドウ酒を彼らが捧げたのです。また、十字架の道行きでは、車椅子に乗った知的障害の青年たちが十字架を担ぎ、それを母親たちが泣きながら支えました。たしかに、障害者たちがすべての祝祭の中心でした。彼らによって、わたしたちは神の優しさに溢れた愛の御顔をかいま見たのです。

この巡礼では、異なる背景の人々が一つにされました。高い教育を受けた都会の人々が、教育を受けていない村の人々と遊びに興じ、この国の大部分を占めるベンガル人が少数部族の歌を習い、全盲の女性が車椅子に乗った人に助けられたのです。重い知的障害の子どもの母親たちは、子どもたちを担当の青年たちに託しました。子どもたちは青年たちと遊び、絵を描きました。昼の祈りのときに、この子供たちは自分たちの描いた色とりどりの絵を祭壇に捧げ、実に多様な何百もの人々が一つの心にされたのです。弱い者や傷つきやすい子どもたちの中に現された神の愛への感謝に満たされたのです。

深い悲しみのときもありました。たくさんの時間が、長い物語をに分かち合うことに割られました。希望と苦悩と絶望の物語、わずかな希望を何とか見い出そうと待ち続ける物語。

長い杖を使えば何とか歩くことのできる一人のおばあさんは、自分がお米を炊くための薪を探して村近くの林にどうやって毎日出かけるかを話してくれました。はじめは一人で何とか歩き出し、途中会う人だれにでも助けてくれるように頼んでいました。次に村の子どもたちが彼女を助けながら一緒に薪を探すようになり、しだいに彼女はたくさんの人々の「おばあちゃん」になったのです。

それまで車椅子を一回も見ただけの重度障害の青年は、車椅子から離れることを残念がり、「わたしも人生で何かをしたい」と聖堂で声を上げました。

自分は全く何もできないとずっと思っていた全盲の少女は、自分が歌のコンテストで一位になったことを誇らしげに語りました。

マイメンシンからディナシブルの巡礼に来たイスラム教徒の婦人は、急な病が原因で長い闘病生活が始まり、その結果両足の機能を失ったこと、そして暗闇の中から新しい人生へ歩き出すのにどれほど苦悩したかを語りました。

そして多くの人々が心からの叫びを上げました。「助けてください。わたしたちも生きたいのです。わたしたちも喜びたい。喜びを人々に伝えたい。」

深い悲しみと苦悩がそこにはありました。しかし同時に、溢れ出る喜び、生きてゆく勇氣、命を愛する勇氣もそこにはあったのです。この二つの巡礼の深いところで、弱い人々や傷つきやすい人々が、わたしたちの心呼び覚まし、そしてわたしたちの内側に平和と交わりのきずなを創りだしたのです。

わたしたちは、このような弱い人々、傷つきやすい人々に仕えるために集められたのでした。彼らもまたわたしたちに仕えるために集められたのです。わたしたちの内側の新しい展望を呼び覚ますために。

新しい展望、それはわたしたちがひとつの体——キリストの体——として集められるということ。このようにして、弱い人々、傷つきやすい人々は、神の優しさにあふれた御顔をかいま見させてくれたのです。

みんな家に戻りました。協力してくれた青年たちも学校に戻りました。障害者に触れると不幸になるという迷信がいまだに残っている村に住む障害者にとっては、家に戻るのはつらいことでした。自分の将来に希望をもって戻っていった人たちもいました。そこには葛藤が待ち受けていること、現実の苦悩の中で実に多くの忍耐が必要であること、これらを彼ら知っています。しかし確かに、希望に向かって扉は開かれたのです。

この二つの巡礼の準備のために膨大な労力を惜しまなかった青年たちの中には、弱者や貧しい人々のために生きる決心し、マイメンシンのCCHで新たに訓練を受け始めている人たちもいます。訓練を受けているときも、バロマリやディナシブルで共に過ごした日々の体験が彼らに息を吹き込み続けています。それは弱者や貧しい人々がわたしたちの教師だという体験です。弱者や貧しい人々こそ、信頼と交わりと愛の社会を築くための教師なのです。

CCH(障害者コミュニティセンター)のスタッフ、アハドゥルとカントゥジョンは何人かのボランティアと一緒に、毎日自転車マイメンシンの近くのイスラム教徒の村々を訪ねています。終わりに、そのような村に住む子供の障害者を何人か紹介しましょう。

ルベル:お父さんは日雇いの労働者です。10歳で、10人兄弟の4番目です。2年前、近所の畑の木から落ち、数日後、腰に痛みを感じ、起き上がれないことに気づきました。両親は10日ほど様子を見てから村医者呼びましたが直りません。それで両親は彼をマイメンシンの医科大学病院に連れてゆくことにしました。5ヵ月間入院しましたが、何も変わりません。そこで首都ダッカの病院に移されました。6ヵ月後、何も変わらないまま彼は家に帰されてしまいました。両親は、もうルベルに直る見込みはない、このまま死ぬまで待つしかないと考えました。床ずれがひどくなり、悪臭さえ漂うようになりました。

偶然、CCHのスタッフがルベルのことを耳にし、彼を訪ねました。スタッフは両親に手術をすすめましたが、両親はもうそういう話を信じることはできませんでした。そうする内にルベルは別の病気にかかり、急遽病院に運ばれました。しかし医者は彼のことをすでにあきらめていて、その場で家に帰したのでした。

家で両親はコーランを唱え、ルベルの死の準備を始めました。CCHのスタッフは両親に、ダッカ近郊のシャバールにあるCRP(身体麻痺者のためのリハビリセンター)に彼を送ってはと提案しました。CRP

は、まさにルベルのように事故によって身体が麻痺した人々の治療を専門としているのです。両親は提案を断りました。ルベルはこの家で、両親の見守るところで死ぬべきだと言うのです。

ところが奇跡が起きました。その家族の友人が、深い悲しみの内にある両親を説得し、両親はとうとうこのCCHのスタッフを信頼する気持ちになったのです。このスタッフが何回もこの家を訪ね、家族の悲しみと連帯し心を砕いていることに動かされたのです。

ルベルはすぐにCRPに運ばれました。手術は成功し、ルベルは生き残りました。現在彼はとても元気です。車椅子で動き回り、生きている喜びと幸せが周りの人々に伝わります。

リマ：8歳の女の子です。貧しい両親には3人の子供がいます。彼女は脳性小児麻痺を患い、数年前両親がCCHを訪ねて来たときは、座ることができず、両足両手で地面を這う生活をしていました。話すこともほとんどできず、いつもよだれをたらしていました。彼女の服はいつもひどく汚れていました。

CCHのスタッフたちは、母親に理学療法の簡単な方法を学んでもらい、リマの成長をどのように支えるかを教えました。リマは現在立ち上がることができず。小さな杖を使って歩くこともでき、学校にも通っています。よだれも止まり、自分の服をととてもきれいにしています。両親にとって何という喜びだったことでしょう。リマの家に希望が訪れました。

ホスナ・アラ：13歳の少女。とても背が低いのです。80cmぐらいしかありません。とても美しい少女ですが、背の低さは彼女にとって大きな痛みでした。家から出かけると、人々は彼女を奇異の目で眺め、子どもたちはからかいました。悲しみと苦痛のあまり、引きこもるようになり、学校に行くのもやめ、「背が低い」という社会的な障害に耐えられなくなりました。CCHのスタッフがホスナを訪ねました。両親はホスナのことについて語るのを嫌がりました。何回も何回もスタッフはこの家族を訪問し、とうとう両親はホスナをCCHに連れてくる気になりました。ある「オープンハウス」の日、両親とホスナはCCHにやってきました。そこでたくさん障害者と出会い、共に歌い遊び、話し、笑いました。両親は驚きに包まれました。ホスナが心を開き、人々と話し遊んでいるのです。これを見て、両親もその輪に入りました。

この日以来、「オープンハウス」の日に、ホスナはいつもCCHに来るようになり、新しい友人もできました。自分自身を受け入れることを次第に学んだのです。もうひとりではありません。もはや疎外された者ではないこと、他の人々と同じような人間であることに気づき始めたのです。

シャプラ：3歳の女の子です。父親はいません。母親は他の家に働きに出かけ、3人の子供の世話をする時間がほとんどありません。母親が家にいないときは、幼いお兄さんがシャプラをいつもだっこしていました。シャプラが1歳のある日、シャプラは地面に落ち、背中をひどく打ってしまいました。何が起きたかを本当に理解できる人はだれもいなくて、だれもシャプラの痛み特別な注意を向けませんでした。しばらくして、シャプラは座ることも歩くこともできなくなりました。お母さんは歩かせようとしたのですが、シャプラは這うばかりでした。村医者やファビル（不思議な力を持つと信じられている祈祷者）が呼ばれましたが、一向に直りません。シャプラの背中さらさらひどくなり、体はますます堅くなりました。とうとう一人では動けなくなりました。母親の収入はわずかで、子どもたちに必要なだけ食べさせることもできず、シャプラはしだいに細くなっていきました。

CCHのスタッフがシャプラと母親に初めて会ったとき、その場では何もすることができませんでした。しかしその後、CCHから食料を届け、どのようにシャプラと生活すべきかを母親と相談しました。

自分の娘に何が起きたのかを知り、母親は深い悲しみと自責の念にかられました。自分の貧困と無知によって、自分の娘が一生障害を負う者になったことに苦しみました。CCHのスタッフは、この家族を訪ね続けています。そして必要に応じてさまざまな助けを提供しています。母親にとって、一人で苦しみを背負うより、だれかがそばに共にいてくれることは大きな慰めなのです。

バングラデシュでは雨期が始まりました。まもなくどの川も幅が広がり、低地は洪水に覆われるでしょう。スラムの貧しい人々は、高いところに移動せねばなりません。村々ではお米の苗床づくりが始まります。

狭い国土にこれほど多くの人々、それも貧しい人々が住むバングラデシュ。ここでわたしたちは祈り続けます。人々の近くに一緒にとどまり続けます。わたしたちの周りに暮らすすべての人々との連帯の道を探し続けます。多くの青年たちが、わたしたちテゼのブラザーと一緒に貧しい人々との連帯を生きています。毎日昼どきに、バングラデシュのテゼのこの小さな聖堂で、わたしたちはこう祈ります。

「主よ、この国を祝福してください。貧しい人々の中に隠されている賜物が花を開き、信頼と交わりと愛の実を結びますように。」

心をこめて
ブラザー・フランク